一兵卒と銃

南部修太郎

青空文庫

霧の深い六月の夜だつた。丁度N原へ出張演習の途上のことで、長い四列縦隊を作つた我我のA歩兵聯隊はC街道を北へ北へと行進してゐた。

風はなかつた。空氣は水のやうに重く沈んでゐた。人家も、燈灯も、畑も、森も、川も、丘も、そして歩いてゐる我我の體も、灰を溶したやうな夜霧の海に包まれてゐるのであつた。頭上には處處に幽かな星影が感じられた。

「おい小泉、厭やに蒸すぢやないか……」と、私の右隣に歩いてゐる、これも一年志願兵の河野が囁いた。

「さうだ、全く蒸すね。惡くすると、明日は雨だぜ……」と、私は振り向き樣に答へた。河野の眠さうな眼が闇の中にチラリと光つた。

「うむ……」と、河野は頷いた。「然し、演習地の雨は閉口するな……」と、彼はまた疲れたやうな聲で云つた。

「ほんとに雨は厭やだな……」と、私はシカシカする眼で空を見上げた。

夜は大分更けてゐた。「遼陽城頭夜は更けて……」と、さつきまで先登の一大隊の方で聞えてゐた軍歌の聲ももう途絶えてしまつた。兵營から既に十里に近い行程と、息詰るやうに蒸し蒸しする夜の空氣と、眠たさと空腹とに壓されて、兵士達は疲れきつてゐた。誰もが體をぐらつかせながら、まるで出來の惡い機械人形のやうな足を運んでゐたのだつた。隊列も可成り亂れてゐた。

私の左側にゐる中根二等卒はもう一時間も前から半分口をダラリと開けて、眠つたまま歩いてゐた。平生からお人好しで、愚圖で、低能な彼は、もともとだらしのない男だつたが、今は全く正體を失つてゐた。彼は何度私の肩に倒れかゝつたか知れなかつた。そしてまた何度私は道の外へよろけ出さうとする彼を抑へてやつたか知れなかつた。

「おい、寢ちやあ危いぞ……」と、私は度毎にハラハラして彼の脊中を叩き著けた。が、瞬間にひよいと氣が附いて足元を堅めるだけで、また直ぐにひよろつき出すのであつた。

「みんな眠つちやいかん……」と、時時我我の分隊長の高岡軍曹は無理作りのドラ聲を張り上げた。が、中根ばかりではない、どの兵士達ももうそれに耳を假すだけの氣力はなかつた。そして、まるで酒場の醉ひどれのやうな兵士の集團は濕つた路上に重い靴を引き摺りながら、革具をぎゆつぎゆつ軋らせながら劍鞘を互にかち合せながら、折折寢言のやうな唸り聲を立てながら、まだ五六里先のN原まで歩かなければならなかつた。

「F町はまだかな……」とまた河野が振り向いて、思ひ出したやうに訊いた。

「もう直きだ。よつ程前にE橋を渡つたからな……」と、私は眠たさを堪へながら生返事をした。

「さうか、それでもまだ先はなかなか遠いなあ……」と、河野は右手の銃を重さうにずり上げながら云つた。

「うん、それもさうだが、何しろ己はもう眠くて閉口だ。此處らでゴロリとやつちまひたいな……」

「全くだ。今一寢入させてくれりやあ命も要らないな……」

「はは、かうなりやあ人間もみじめだ……」と、私は暗闇の中で我知らず苦笑した。

河野も私もそのまま口を噤んだ。そして、時々よろけて肩と肩を

ぶつけ合つたりしながら歩いてゐた。私はもう氣になる中根の事なんかを考へる隙はなかつた。自分自身まるで地上を歩いてゐるやうな氣持はしなかつた。重い背嚢に締め著けられる肩、銃を支へた右手の指、足の踵――その處處にヅキヅキするやうな痛みを感じながら、それを自分の體の痛みとはつきり意識する力さへもなかつた。

そして、――寢てはならん…と、一所懸命に考へてはゐながら、何時の間にかトロリと瞼が落ちて、首がガクリとなる。足がくたくたと折れ曲るやうな氣がする。はつと氣が附くと、前の兵士の背嚢に鼻先がくつついてゐたりした。

「眠つては危險だぞ。左手の川に氣を附けろ…」と、暫くすると突然前の方で小隊長の大島少尉の呶鳴る聲が聞えた。

私はきよつとして眼を開いた。と、左手の方に人家の燈灯がぼんやり光つてゐた――F町かな…と思ひながら闇の中を見透すと、街道に沿つて流れてゐる狹い小川の水面がいぶし銀のやうに光つてゐた。霧は何時しか薄らいで來たのか、遠くの低い丘陵や樹木の影が鉛色の空を背にしてうつすりと見えた。

「志願兵殿、何時でありますか…」と、背後から兵士の一人が訊ねた。

「一時十五分前だ…」と、私は覺束ない星明りに腕時計をすかして見ながら答へた。

が、さう答へながらも夜がそんなに更けたかと思ふと同時に、私の眠たさは一さう濃くなつた。そして、ふらふらしながら歩き續けてゐる内に現實的な意識は殆ど消えて、變にぼやけた頭の中に祖母や友達の顏が浮び上つたり、三四日前にK館で見た活動寫眞の場面が走つたりした。――夢かな…と思ふと、木の空洞を叩くやうな兵士達の鈍い靴音が耳に著いた。――歩いてるんだな…と思ふと、何時の間にか知らない女の笑ひ顏が眼の前にはつきり見えたりした。仕舞には、そのどつちがほんとの自分か區別出來なくなつた。そして、時時我知らずぐらぐらとひよろけ出す自分の體をどうすることも出來なかつた。

何分か經つた。突然一人の兵士が私の體に左から倒れかかつた。私ははつとして眼を開いた。その瞬間私の左の頰は何かに厭やと云ふ程突き上げられた。

「痛い、誰だつ…」と、私は體を踏み應へながらその兵士を突き飛ばした。と、彼は闇の中をひよろけてまた背後の兵士に突き當つた、「氣を附けろい…」と、その兵士が呶鳴つた。彼はやつと我に返つて歩き出した。

「中根だな、相變らず爲樣のない奴だ…」と、私は銃身で突き上げられた左の頰を抑へながら、忌々しさに舌打ちした。

が、この出來事は私の眠氣を瞬間に覺ましてしまつた。闇の中を見透すと、人家の燈灯はもう見えなくなつてゐた。F町は夢中で通り過ぎてしまつたのだつた。そして、變化のない街道は相變らず小川に沿うて、平な田畑の間をまつ直ぐに走つてゐた。霧は殆ど霽れ上つて、空には星影がキラキラと見え出した。ひんやりした夜氣が急に體にぞくぞく感じられて來た。

「おい河野…」と、私は變な心細さと寂しさを意識して、右手を振り向いて詞を掛けたが、河野は答へなかつた。首をダラリと前に下げて、彼は眠りながら歩いてゐた。

――然し、みんなやつてるな…と、續いて周圍を見廻した時、私は夜行軍の可笑しさとみじめさを感じて呟いた。四列縱隊は五列

になり三列になりして、兵士達はまるで夢遊病者のやうにそろそろ歩いてゐるのだつた。指揮刀の鞘の銀色を闇の中に閃かしてゐる小隊長の大島少尉さへよろけながら歩いてゐるのが、五六歩先に見えた。

が、寝そけてしまつた私の頭の中は變に重く、それに寒さが加はつて來てゾクゾク毛穴がそば立つのが堪らなく不愉快だつた。私は首をすくめて痛む足を引き摺りながら厭や厭や歩き續けてゐた。

「さうだ、もう月が出る時分だな……」と、暫くして私は遠く東の方の地平線が白んで來たのに氣がついて呟いた。その空の明るみを映す田の水や、處處の雜木林の影が蒼黒い夜の闇の中に浮き上つて見え出した。私はそれをぢつと見詰めてゐる内に、何となく感傷的な氣分に落ちて來た。そして、そんな時の何時もの癖で、Sの歌なんかを小聲で歌ひ出した。何分かがさうして過ぎた。

と、いきなり左の方でガチヤガチヤと劍鞘の鳴る音がした。ゴソツと靴の地にこすれる音がした。同時に「ウウツ……」と唸る人聲がした。私がぎよツとして振り返る隙もなかつた。忽ち夜の暗闇の中に劇しい水煙が立つて、一人の兵士が小川の中にバチヤンと落ち込んでしまつた。

——とうとうやつたな……と、私は思つた。そして、總身に身顫ひを感じながら立ち留つた。中根の姿が見えなかつた。小川の油のやうな水面は大きく波立つて、眞黒な人影が毆れた蝙蝠傘のやうに動いてゐた。

「誰だ、誰だ……」と、小隊の四五人は川岸に立ち止まつた。

「中根だ……」と、私は呟鳴つた。

混亂が隊伍の中に起つた。寢呆けて反對に駈け出す兵士もゐた。ポカンと空を見上げてゐる兵士もゐた。隊列の後尾にゐた分隊長の高岡軍曹は直ぐに岸に駈け寄つた。

「早く上げてやれ……」と、彼は呟鳴つた。

中根は水の中で二三度よろけたが、直ぐに起上つた。深さは胸程あつた。

「おい銃だよ、誰か銃を取つてくれよ……」と、中根は一所懸命に右手で銃を頭の上に差し上げながら呟鳴つた。そして、右手でバチヤバチヤ水を叩いた。割に流れのある水はともすれば彼を横倒しにしさうになつた。

「大丈夫だ、水は淺い……」と、高岡軍曹はまた呟鳴つた。「おい田中、早く銃を取つてやれ……」

「軍曹殿、軍曹殿、早く早く、銃を早く……」と、中根は岸に近寄らうとしてあせりながら叫んだ。銃はまだ頭上にまつ直ぐ差し上げられてゐた。

「田中、何を愚圖々々しとるかつ……」と、軍曹は躍氣になつて足をどたどたさせた。

「はつ……」と、田中はあわてて路上を腹這ひになつて手を延ばした。が、手はなかなか届かなかつた。手先と銃身とが何度か空間で交錯し合つた。

「留つとつちやいかん。用のない者はずんずん前進する……」と、騒ぎの最中に小隊長の大島少尉ががみがみした聲で呟鳴つた。

岸邊に丸くかたまつてゐた兵士の集隊はあわてて駈け出した。私もそれに續いた。そして、途切れに小隊の後を追つて漸くもとの隊伍に歸つた。劇しい息切れがした。

間もなく小隊は隊形を復して動き出した。が、兵士達の姿にはも

う疲れの色も眠たさもなかつた。彼等は偶然の出來事に變てこに興奮して、笑つたり呶鳴つたり、飛び上つたりしてはしやいでゐた。大地に當る靴音は生き生きして高く夜の空氣に反響した。

「とうとう『馬さん』やりやあがつた……」と、一人の兵士がげらげら笑ひ出した。

「選りに選つて奴が落ちるなんてよつぽど運が惡いや……」と、一人はまたそれが自分でなかつた事を祝福するやうに云つた。

「また髭にうんと絞られるぜ……」

「可哀想になあ……」

中根熊吉の「馬さん」は二年兵の二等卒で、中隊でもノロマとお人好しとで有名だつた。教練の度毎にヘマをやつて小隊長や分隊長に小言を云はれ續けだつた。戰友達にもすつかり馬鹿にされてゐた。鼻が低くて眼が細くて、何處か間の拔けた感じのする平べつたい顏——その顏が長いので「馬さん」と言ふ綽名がついた。が、中根は都會生れの兵士達のやうにズルではなかつた。決して不眞面目ではなかつた。彼は實際まつ正直に「天子樣に御奉公する」積りで軍務を勉強してゐたのである。が、彼の生れつきはどうする事も出來なかつた。で、彼はムキになればなるだけ教練や武術に失敗し、上官達に叱りつけられ、戰友達にはなぶり物にされるのだつた。——氣の毒だな……と、思ふことが私も度々あつた。

「然し、僕もずゐ分氣を附けちやあゐたんだぜ……」と、私は傍の兵士を顧みた。

「さうですか。でも、ありやあ好い眠氣覺しですよ……」と、彼は冷淡に答へた。

「ふふ、眠氣覺しも利き過ぎらあ……」

「はつはつはつ、水の中で一生懸命に銃を差し上げた處は好かつたね……」

「とんだ五九郎だ……」と、誰かが呟いた。劇しい笑聲がわつと起つた。

が、暫くすると中根の話にも倦きが來た。そして、三十分も經たない内にまた兵士達の歩調は亂れて來た。ゐ眠りが始まつた。みんなは下弦の月が東の空に出て來たのも氣が附かずに醉ひどれのやうに歩いてゐた。

N原の行手はまだ遠かつた。私が濡れしよびれた中根の姿を想像して時時可笑しくなつたり、氣の毒になつたりした。が、何時か私も襲つてくる睡魔を堪へきれなくなつてゐた。

N原の出張演習は二週間程で過ぎた。我我は日日の劇しい演習に疲れきつた。そして、六月の下旬にまたT市の居住地に歸營した。中根の話はもうすつかり忘れられてゐた。中根自身も相變らず平べつたい顏ににやにや笑ひを浮べながら勤務してゐた。

歸營してから三日目の朝だつた。中隊教練が濟んで一先づ解散すると、分隊長の高岡軍曹は我々を銃器庫裏の櫻の樹蔭に連れて行つて、「休めつ……」と、命令した。私はまた何かの小言でも聞くのかと思つて、軍曹の鼻の下にチヨツピリ生えた口髭を眺めてゐた。

「何でえ、何でえ……」と、小聲でいぶかる兵士もあつた。

高岡軍曹は暫くみんなの顏を見てゐたが、やがて何時ものやうに胸を張つて、上官らしい威嚴を見せるやうに一聲高く咳をした。

「今日貴樣達を此處へ集めたのは外でもない。この間N原へ行く途中に起つた一つの出來事に對する己の所感を話して聞かせたいのだ。

それは其處にゐる中根二等卒のことだ。貴樣達も知つとる通り中根はあの行軍の途中過つて川へ落ちた……」と、軍曹はジロリと中根を見た。「クスつ……」と、誰かが同時に吹き出した。中根はあわてて無格好な不動の姿勢をとつたが、その顏には、それが癖の間の抜けたニヤニヤ笑ひを浮べてゐた。——またやられるな……と思つて、私は中根のうしろ姿を見た。

「然るに、あの川は決して淺くはなかつた。流れも思ひの外早かつた。次第に依つては命を奪はれんとも限らなかつた。その危急の際中根はどう云ふ事をしたか。さあ、みんな聞け、此處だ……」と、軍曹は詞を途切つてドタンと、軍隊靴で大地を踏みつけた。「中根はあの時、自分の身の危急を忘れて銃を高く差し上げて『銃を取つてくれ……』と、己に向つて云つたのだ。即ち銃を愛し守る立派な精神を示したのだ……」と、軍曹は咳一咳した。

「抑も銃は歩兵の命である。軍人精神の結晶である。歩兵にとつて銃程大事な物はない。場合に依つてはその體よりも大事である。譬へば戰場に於て我々が負傷する。負傷は直る、然し、精巧な銃を毀したならば、それは直らない。況してあの時中根が銃を離して顧みなかつたならば、銃は水中に無くなつたかも知れない。即ち歩兵の命を失つたことになる。然るに、中根は身の危急を忘れて銃を離さず、飽くまで銃を守らうとした。あの行爲、あの精神は正に軍人精神を立派に發揚したもので、誠に軍人の鑑である。一體中根は平素は決して成績佳良の方ではなかつた。己も度度嚴しい小言を云つた。が、人間の眞面目は危急の際に初めて分る。己は中根の眞價を見誤つてゐた。實に中根は歩兵の模範的精神を己に見せてくれた。實に……」と、感情的な高岡軍曹は躍氣となつて中根を賞讃した。そして、興奮した眼に涙を溜めてゐた。「貴樣達はあの時の中根の行爲を笑つたかも知れん。然し、中根は正しく軍人の、歩兵の本分を守つたものだ。豪い、豪い……」

かう云ひ續けて、高岡軍曹はやがて詞を途切つたが、それでもまだ賞め足りなかつたのか、モシヤモシヤの髭面をいきませて、感に餘つたやうに中根二等卒の顏を見詰めた。分隊の兵士達はすべての事の意外さに呆氣に取られて、氣の抜けたやうに立つてゐた。が、日頃いかつい軍曹の眼に感激の涙さへ幽かに染んでゐるのを見てとると、それに何とない哀れつぽさを感じて次から次へと俯向いてしまつた。

が、中根は營庭に輝く眞晝の太陽を眩しさうに、相變らず平べつたい、愚鈍な顏を軍曹の方に差し向けながらにやにや笑ひを續けてゐた。

青空文庫情報

底本：「新進傑作小説全集　第十四巻（南部修太郎集・石濱金作集）」平凡社
　　1930（昭和5）年2月10日発行
初出：「文藝倶樂部」1919（大正8）年12月号
入力：小林徹
校正：松永正敏
2003年12月6日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一兵卒と銃

南部修太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/